

三瓶自然館野外観察コーナーで見られた鳥類 — 2021年度の調査記録 —

星野由美子*

A Record of Wild Bird Observed from Birdwatching Room in the Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe — Survey record for 2021 —

Yumiko Hoshino

Keywords : avifauna, breeding season, bathing area

キーワード : 鳥類相, 繁殖期, 水場

1. はじめに

鳥根県立三瓶自然館では、野外の自然を展示の一部として位置づけている。そのひとつとして、本館1・2階の一角に「野外観察コーナー」を設け、人工的に配した巨石の上に、適度な量の水を流し、野鳥のための水浴びや水飲み場（以下、水場）としている。この水場には1991年の開館当初から多くの野鳥が水浴びに訪れており、出現した鳥類については、2000～2005年（第Ⅰ期）および2010～2015年（第Ⅱ期）にかけて実施した調査結果を報告している（星野, 2004;2015）。

前回調査開始から10年が経過したため、2020年4月から第Ⅲ期の調査を開始した（星野, 2021）。

ここでは第Ⅲ期調査の2年目となる2021年4～11月に観察された鳥類を報告する。

2. 調査地の概要

鳥根県立三瓶自然館は、鳥根県のほぼ中央にある三瓶山（標高1,126 m）の北麓、標高約550 m 付近にある。施設は、1991年に開館した本館のほかに、2002年に増築された別館と新館の大きな3つの建物を有しており、山腹に建設された各施設を、長い回廊が山肌を縫うようにつなげている。野外観察コーナーは、本館1・2階の奥まった一角にあり、大きなガラス張りの窓か

ら、奥行き約10m、高さ15mの斜面に設置された水場を観ることができる（図1）。この水場は、一般来館者は立ち入ることができない。



図1 三瓶自然館野外観察コーナーから見る水場

水場周辺の樹種は、クロモジやシデ類のほか、ウリハダカエデやコナラなども見られる。また、斜面上部にはアカマツがまとまって見られる。この樹種は、三瓶自然館が立地する北の原周辺の樹林と同様である（星野, 2015）。

野鳥のための水場は、高さ約1 m、幅1.5mの石の上に、幅30cm、奥行き60cmのくぼみを作り、人工的な流水を約5 ml/sec. で流している。水場のすぐ脇には、野鳥の止まり木となるイヌツゲや枯れ枝などが配置されている（図2）。また、そこから約5～10m下流には、深さ1 m程度の溝があり、近年、一部に泥が溜まって水深5～15cm程度となっている部分があり、ここでも少数の水浴びが見られる。

* 鳥根県立三瓶自然館, 〒694-0003 鳥根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan



図2 野鳥の水浴び場となっている水たまり

3. 方 法

第Ⅲ期調査は、第Ⅱ期調査と同様に4～11月に毎月1回ずつ調査を実施している。調査は、天候や来館者による影響を軽減するため、荒天でない休館日に行った（7、8月は開館日に実施した）。調査時間は、9時から19時までを基本とし、日照時間が短くなる9～11月については、水場が暗くなって目視観察が不可能になる時間までの調査とした。出現種の記録は、目視による観察を基本とし、野外観察コーナー（館内）から水場に飛来するすべての個体の種類と出現数を記録した。また水浴びは、繰り返し水場に入出入りすることも多いことから、周辺から完全に飛去しない場合は、カウントをせず、計数が重複しないようにした。

この出現数から、水場を利用する鳥類の優占度を算出したが、ここでの優占度はこれまでの調査に倣い、全出現数に対する各種の出現数の割合をその種の優占度とした。

種名等の表記は、原則として日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会、2012）によるものとした。

4. 結 果

(1) 出現種の概要

2021年において記録された出現種数および出現数は3目17科27種、総計905羽となった（表1）。日本野鳥の会鳥根県支部（1997）による季節区分の内訳によると留鳥17種、夏鳥5種、冬鳥3種、旅鳥1種、掲載なし1種であった。また、環境省のレッドリスト（2020）（以下、国RLとする）掲載種は1種、鳥根県版レッドデータブック（2014）（以下、しまねRDBとする）掲載種は2種の出現があった。また、これまでの調査では確認されなかったサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* が新たに確認された。

本調査地の周辺の自然環境は、落葉広葉樹林に針葉樹のアカマツが点在する樹林であることから、出現した種のはほとんどの種類は、一般的に森林でよく見られる鳥類であり、さらに水場を水浴びや水飲みで利用した種は、全長30cm以下の比較的小型の鳥類であった。

調査期間中の出現種数の変動は図3のようになった。種類数が最も多いのは4月および6月の14種で、ついで7月の12種、5月の11種であった。また最も少なかったのは11月の7種で、次いで8月および9月の8種であった。これまでの調査では春の渡り期にあたる4月が多く、繁殖期の8月で減少し、秋の渡り期である11月にやや増加する傾向があるが（星野、2015）、本年はやや異なる傾向であった。

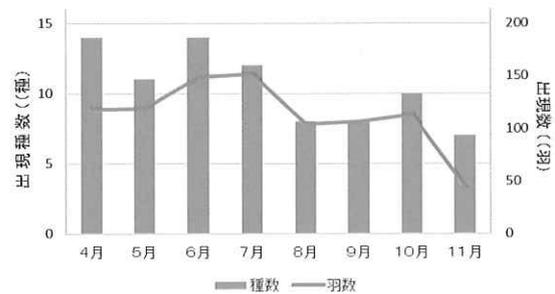


図3 月別の出現種数および出現数

(2) 出現数と優占度

水場に出現した全ての出現数について、月別の変化を表すと図3のようになった。出現数が最も多い月は7月の152羽であり、次いで6月の149羽であった。出現数が最も少ない月は11月の44羽であった。これまでのⅠ・Ⅱ期の調査では、6～8月の繁殖期で最も多い個体数が記録されており（星野、2007;2015）、これまでと類似の傾向であった。

また、出現数をもとに算出した2021年の優占度は表1および図4のようになった。出現した全27種のうち優占度5%以上の鳥は7種で、全出現数における割合は90.8%であった。優占度が高かった種は、上から順にヤマガラ *Poecile varius* の30.6%（277羽）、キビタキ *Ficedula narcissina* の16.4%（148羽）、シジュウカラ *Parus minor* の15.7%（142羽）、メジロ *Zosterops japonicus* の11.0%（100羽）が10%以上であり、以下ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* の6.2%（56羽）、ヒガラ *Periparus ater* の6.0%（54羽）、エナガ *Aegithalos caudatus* の5.0%（45羽）が5%以上であった。

これらの優占度が高い7種のうち6種については、第Ⅱ期水場鳥類調査でも優占度の上位（5%以上）8種（優占度上位からヤマガラ、アトリ *Fringilla montifringilla*、シジュウカラ、エナガ、メジロ、キ

表1 2021年に三瓶自然館の水場で見られた鳥類

目名	科名	和名	学名	国RL	しまねRDB	区分	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		統計	優占度									
							27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日			13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日
キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>			留	1															2	0.2										
		アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>			留	1																1	0.1									
スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	絶滅危惧II類	情報不足	夏	1															1	0.1										
		カラス科																															
		カケス	<i>Garrulus glandarius</i>			留																2	0.2										
		ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>			留	5															5	0.6										
		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>			留				1												1	0.1										
		キクイタダキ	<i>Regulus regulus</i>			冬																1	0.1										
		シジュウカラ科																															
		コガラ	<i>Parus montanus</i>			留	2	2	13	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	30	3.3										
		ヤマガラ	<i>Parus varius</i>			留	27	30	40	44	28	28	36	36	51	21	21	277	30.6														
		ヒガラ	<i>Parus ater</i>			留	4	4	8	8	10	7	9	9	4	4	54	6.0															
		シジュウカラ	<i>Parus major</i>			留	12	30	32	32	12	8	13	3	3	142	15.7																
		ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>			留	19	12	5	14	3	3	3	3	3	56	6.2																
		ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>			夏																1	0.1										
		エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>			留	5	7	2	4	4	4	4	4	17	10	45	5.0															
		エゾムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>			旅																2	0.2										
		メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>			留	11	12	16	19	14	14	22	6	6	100	11.0																
		ゴジュウカラ科																															
		ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>			留	2	5	2	2	2	2	2	2	2	9	1.0																
		シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>			冬																2	0.2										
		コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>			夏																2	0.2										
		キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>			夏	24	18	19	25	34	28	28	1	2	148	16.4																
		オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>			夏				1	1	1	2	2	4	0.4																	
		スズメ	<i>Passer montanus</i>			留				1	1	1	1	1	1	0.1																	
		キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>			留	3	3	1	1	1	1	1	1	4	0.4																	
		アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>			冬	2	2	2	2	2	2	2	2	3	7	0.8																
		カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>			留				2	2	2	2	2	2	2	0.2																
		ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>			留				3	3	3	3	3	3	5	0.6																
【外来種】																																	
チメドリ目	ソウシチヨウ科	ソウシチヨウ	<i>Leiothrix lutea</i>			-				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0.1										
		出現数					118	119	149	152	104	106	113	44	905																		
		出現種数					14	11	14	12	8	8	10	7	27																		

ビタキ、カワラヒワ *Chloris sinica*、ヒヨドリ) (星野, 2015) に含まれていた。今回優占度が高かったヒガラは、第Ⅱ期調査では約4% (星野, 2015), 2020年度調査では4.9% (53羽) であった (星野, 2021)。

また、第Ⅱ期で5%以上であったカワラヒワとアトリは出現種数が減少しており、カワラヒワ0.2% (2羽), アトリは0.8% (7羽) であった。

以下、優占度の高い7種の本年における出現状況を示す。

①ヤマガラ・シジュウカラ

これら2種は、調査期間中をとおして一定の数が観察される種類である (図5)。最も優占度が高いヤマガラ (30.6%) と優占度第3位のシジュウカラ (15.7%) は、第Ⅱ期の調査でもヤマガラ (18.7%) が優占度第1位、シジュウカラ (12.9%) が第3位で、優占度に変化はあるものの順位は同様であった (星野, 2015)。また、昨年度も順位は同様で優占度もヤマガラ (22.2%), シジュウカラ (12.5%) と類似の傾向であった。この2種は、巣箱などを利用して繁殖することが知られており、水場周辺でも巣箱や建物などの人工構造物の隙間を利用した巣作りが確認されている。それ以外の種が、周辺の樹木などに自ら作った巣で繁殖していることと比べると、比較的、水場周辺に営巣可能な環境が安定していると考えられる。

②キビタキ

本年の調査では優占度第2位がキビタキであった。

本種は、夏鳥として鳥根県全域に渡来して繁殖する。水場周辺では毎年2~3羽程度の成鳥雄を観察することがあり、2~3個体のさえずりも聞かれる。

出現数の月別変化は、年によって若干の変動はあるものの、7, 8月頃に出現数のピークがあり、11月には観察されなくなるという出現の傾向がある (星野, 2015)。

本年は5, 6月にやや出現数が減少するものの幼鳥が増える8月にかけて出現数が増加し、10月には見られなくなるように、過去の調査結果と同様の傾向がみられた (図6)。

③メジロ

本年の調査では優占度第4位がメジロであった。本年の出現数の推移は、4月から7月にかけて増加し、8月にやや減少したものの、9月が最も多くなった。本種のこれまでの月別変化は、多くの年では4月から8月には出現数が多くなるが、9月をすぎると減少し、11月以降は観察されなくなることから、水場周辺では夏鳥的な飛来特性であることを報告してきた (星野, 2004; 2015)。本年も7月へかけての出現数の増加は過去の状況と類似の傾向が見られたが、8月に出現数が減少し、9月の出現数が最も多かったことは、これまでの出現傾向とは異なっていた (図7)。

④ヒヨドリ

本年の調査では優占度第5位で56羽 (6.2%) であった。出現状況は4月の移動期が出現数のピークであり、8月以降には出現が減少し、11月には観察されなかつ

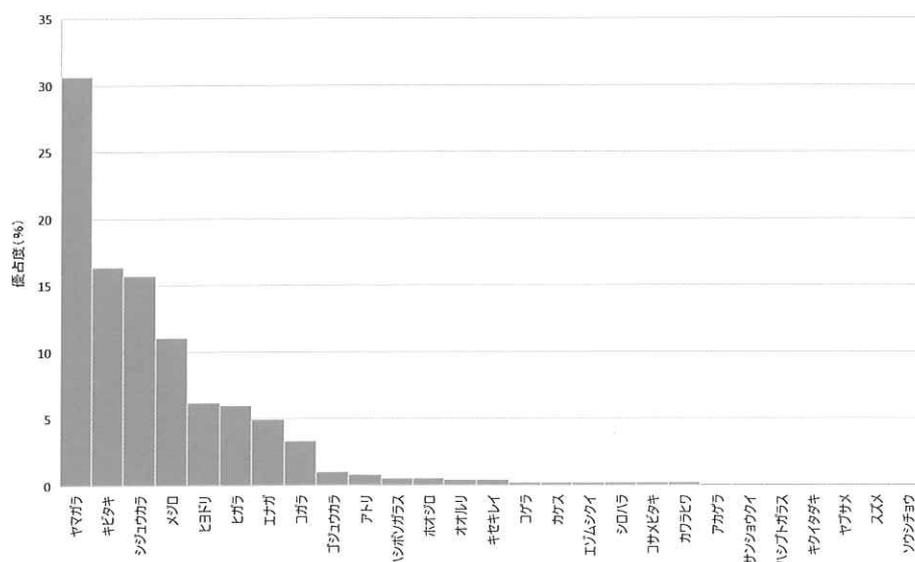


図4 出現種の優占度

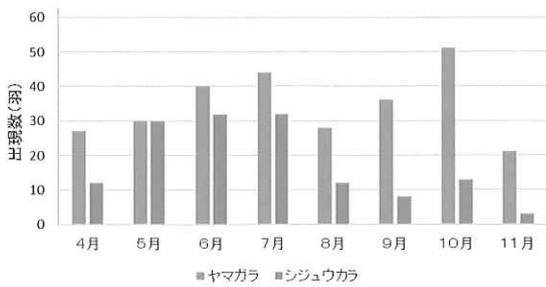


図5 ヤマガラとシジュウカラの出現数

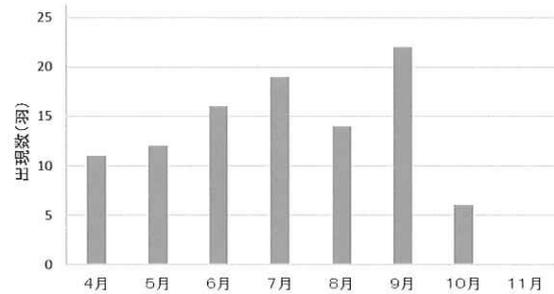


図7 メジロの出現数

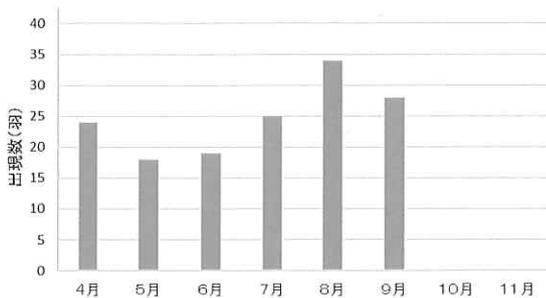


図6 キビタキの出現数

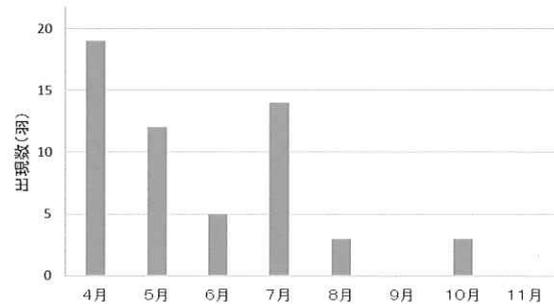


図8 ヒヨドリの出現数

た(図8)。

本種は留鳥とされているが、北方や山地の個体は10～11月頃には大群をなして暖地へ移動することが知られており、鳥根県内でも春の移動時期に、美保関などで渡りの群れが毎年のように観察されている。第Ⅱ期の調査においても9月すぎから出現数が減少する傾向が見られ(星野, 2015)、本年も同様の傾向であった。

⑤ヒガラ

本年の調査では優占度6位で出現数は54羽(6.0%)であり、調査期間をとおして毎月4羽以上が観察された。8月の10羽が最も多く、4、5、11月の4羽が最も少なかった(図9)。本種はこれまで優占度上位(5%以上)となったことがなく、第Ⅱ期では優占度では出現順位が10位(星野, 2015)、昨年は53羽(4.9%)の7位であった(星野, 2021)。昨年度に比べて出現数、優占度ともに微増している。

⑥エナガ

本年の調査では優占度7位で出現数は45羽(5.0%)であった。出現状況は繁殖期から秋にかけて5月と10月以降の2つのピークが見られ、月別の増減幅は大きくなった(図10)。本種は群れで生活することが知られており、群れの出現は6月頃、夏頃、秋頃の3回となるとされているが(中村, 1991)、当地の本年の

繁殖期は1～2羽での飛来であった。10～11月には、幼鳥や若鳥、家族で構成する群れなどの出現となり、1回あたり10羽を超えるまとまった数で現れるため、結果的に優占度が高くなった。

(3) 注目すべき種

①サンショウクイ

今回、新たに確認された種であり、国RLの絶滅危惧種Ⅱ類(環境省, 2020)、しまねRDBの情報不足(鳥根県, 2014)に掲載されている希少種である。鳥根県では、おもに夏鳥として県下全域に渡来する渡り鳥である。三瓶北の原周辺では、毎年、繁殖期に複数個体のさえずりが確認されており施設近隣の樹林でも繁殖していると考えられる。これまでの調査等による周辺での確認記録は、モニタリングサイト1000里地・森林調査においても繁殖期には確認されている(星野, 2016)が、過去の水場調査では観察されたことはなかった。今回の確認は5月11日に成鳥オス1羽が確認された。当該個体は、雌雄が判定できるほど近距離に飛来したが、水浴びをすることなくそのまま通過した。

水場に飛来する希少種は多くなく今後の動向に注目したい。出現状況は前項のとおり。

②コサメビタキ

本種はしまねRDBの情報不足(鳥根県, 2014)に掲載されている希少種である。鳥根県では、おもに夏

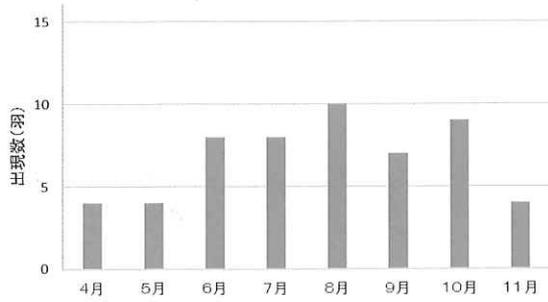


図9 ヒガラの出現数

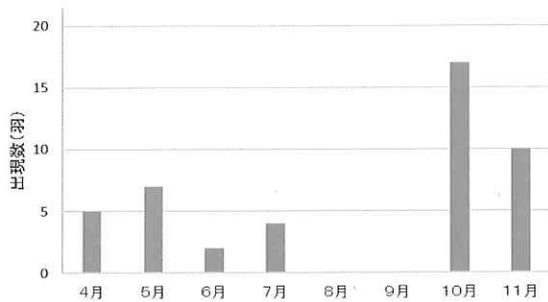


図10 エナガの出現数

鳥として県下全域に渡来する渡り鳥である。三瓶北の原周辺でも繁殖していると考えられるが、観察記録は多くない。これまでの調査等による周辺での確認記録は、モニタリングサイト1000里地・森林調査において2014年の繁殖期に確認されており(星野, 2016)、過去の水場調査では第Ⅱ期の調査で2010, 2012, 2013年の5, 6月に観察されたが、それぞれ1~2羽程度で数は多くなかった(星野, 2015)。今回の確認は6月8日に成鳥(図11)2羽が確認された。



図11 コサメビタキの成鳥個体

③ソウシチョウ

本種はウグイスと繁殖生態が類似していることから競合が懸念されている(江口, 2002) 特定外来種である。本種の三瓶山における記録は1900年代にはないが、

2010年10月31日に室内で、同年11月1日に三瓶自然館脇の雑木林で確認されたのが最初の記録である(森・星野, 2011)。その後、三瓶山北麓の自然林内で実施したモニタリングサイト1000森林調査においても2014年の繁殖期に複数個体のさえずりが確認されている(星野, 2016)ものの、三瓶自然館周辺での生息は確認されていなかった。ところが、昨年の水場調査において、はじめて7月17日に雌雄2個体が観察され、近隣での生息が示唆された(星野, 2021)。

本年も6月8日に1個体が確認されたことと、調査日以外でも職員によってたびたび観察されていた状況から、本年も施設周辺で生息している可能性が高い。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり三瓶自然館のスタッフより水場における鳥類観察の情報提供をいただいた。安食一歩、大隅梨央、岩下幸代各氏には調査に際してご協力をいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上る。

引用文献

- 江口和洋(2002)ソウシチョウ. 外来種ハンドブック(日本生態学会編)p.86, 地人書館, 東京
- 星野由美子(2004)三瓶自然館野外観察コーナーで見られる鳥類 I. 鳥根県立三瓶自然館研究報告2,19-30
- 星野由美子(2015)三瓶自然館野外観察コーナーで見られる鳥類(Ⅱ). 鳥根県立三瓶自然館研究報告13, 27-35
- 星野由美子(2016)2000年から2016年に三瓶山北麓で観察された鳥類. 鳥根県立三瓶自然館研究報告14, 47-55.
- 星野由美子(2021)三瓶自然館野外観察コーナーで見られた鳥類-2020年度の調査記録-. 鳥根県立三瓶自然館研究報告19, 65-71.
- 環境省(2020)環境省レッドリスト2020鳥類, 環境省, 東京
- 森茂晃・星野由美子(2011)鳥根県ソウシチョウ情報. スペキュラム139,5-6
- 中村登流(1991)エナガの群れ社会. 信濃毎日新聞社, 長野 p.269
- 日本鳥学会(2012)日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 東京, p.438
- 日本野鳥の会鳥根県支部(1997)鳥根県鳥類リスト. しまねの鳥. 日本野鳥の会鳥根県支部, pp164-181
- 鳥根県(2014)改訂しまねレッドデータブック, 鳥根県, 鳥根, p.318